

明治社會主義文學集

(一)

小田切進 編

明治文學全集

83

筑摩書房

明治文學全集 83

明治社會主義文學集(一)

昭和四十年七月十日 發行

著者 田 岡 嶺 雲

發行者 古 田 晁
東京都千代田區神田小川町二ノ八

發行所 株式會社 筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
電話 東京二九一―七六五一(代表)
振替口座 東京四 一二三番

明治社會主義文學集(一) 目次

田岡嶺雲篇

黃昏……………一八五

嶺雲搖曳……………三

驛夫日記……………三三

第二嶺雲搖曳(抄)……………五

食後……………四

現代の病根……………六

今の所謂文筆の士……………四八

作家ならざる二小説家……………八

吾人の現時の文壇
見たる……………五〇

戰袍餘塵……………一〇

革命時代と文學……………五三

高山樗陰篇……………一五

鐵火石火(抄)……………五五

樗陰
遺稿無絃琴……………一六

中里介山篇

松岡荒村篇……………一七

笛吹川……………五七

荒村遺稿(抄)……………一五

牧童……………五八

白柳秀湖篇……………一六

亂調激韻……………五九

畜生戀……………一八

水火の賦……………六〇

吉田絃二郎篇

淺黄服の男……………二六

師走の夜空……………二六

兒玉花外篇

社會主義詩集……………二六

花外詩集……………二六

同情錄（抄）……………二七

小塚空谷篇

あはれ靈なき人の子よ 他十五篇……………二七

大塚甲山篇

冬の蝶 他八篇……………二七

兒玉星人篇

淚花集 他一篇……………二七

山口孤劍篇

戰爭を呪ふ 他十篇……………二七

内海信之篇

硝煙——内海信之詩集——（抄）……………二七

小杉未醒篇

陣中詩篇……………二七

附錄 朝鮮日記……………二七

添田啞蟬坊篇

新流行歌集（抄）……………二七



人間僅五十圓（幽冥路）……………二七

蝶ひらり（幽冥路）……………二七

クエカ信徒の信念を懷ふ（高濱長江）……………二七

村の平和（野口雨情）…………… 六六

春の句他（小川芋錢）…………… 七〇

駒繪

小杉未醒…………… 七二

小川芋錢…………… 七五

竹久夢二…………… 七八

平福百穂…………… 八七

平民社時代（堺利彦）…………… 九〇

明治に於ける社會主義文學の勃興と展開

（柳田泉）…………… 九五

明治文學の人民的動向（小田切秀雄）…………… 九六

解題（小田切進）…………… 四三

年譜（小田切進編）…………… 五三

參考文獻（小田切進編）…………… 五五

詳細目次…………… 五三

明治社會主義文學集
(一)

田岡嶺雲篇

嶺雲搖曳

序

われ初め嶺雲と相識らず、七八年前、同郷の學生數十人と共に、大久保あたりに散策しけるが、中に白哲秀眉の少年あり。われと語りて文學の事に及びけるに、滔々として盡きず、古今の大家を是非して、議論風生ず。われいたく喜び、他の郷友を閑却して、獨りこの少年と共に高丘の上に芳草をしきて坐し、眼下一面の蹺躑を俯瞰しつゝ、共に文學を談じたりしが、何ぞ知らむ、これこの少年は後日文壇に盛名を馳するに至れる嶺雲ならむとは。

青年文に據りて、文壇の一方に雄視せしころは、これ嶺雲の全盛時代なりき。強弩の餘勢を江湖文學にとどめしよりこの方は、嶺雲筆を執ること稀なり。たま／＼筆を執るも、復た當年の活氣と精采となし。嗚呼嶺雲が文學者としての生活は、已に終を告げたる乎。

嶺雲は多情の才子也。而して粗豪の氣を負ふ。枯坐して書を読むに堪へず、又顧を友へて寒蟬の鳴をなすに堪へず、起つて世に動かむとするも、志大にして才疎に、困頓し、蹉躓し、事、心と違ひ、事成るなく、徒らに世人に嗤笑せらる。嶺雲の半生も亦憐れむべきかな。

嶺雲もと禪を喜びしに非ずや。老莊の書を受讀せしに非ずや。然るに自から適する所をすて、浮世の功業の途に彷徨するは何事ぞ。思ふに、少年の客氣なほ未だ失せざる乎。憾軻落魄の間に、毫も素志を失はず。われ其意氣を壯とす。唯顧みて其適する所を知れ。而して文學の爲に一臂の力を揮へ。昨、嶺雲常州の山より出で來りたるに明日われ出で、雲州の山中に入らむとす。行李匆匆、手握つて默咄するの遑なく、青邱が「暫時握手又分手、暮雨南陵水寺鐘」の感も當ならず。一窓の春雨、その舊作に對して、覺えず涙數行下る。われその何の故たるを知らず。嶺雲の文は、已に世評あり。親友たる我にして、今更に喁々の言を費さんや。

明治卅二年三月下浣、梅薰る書窓の下に、

桂濱月下漁郎

序

歌はんか哭さんか哭するは其命の窮にして達せざるを以てなり歌ふは文名噴々として世之を傳ふるを以てなり然れども區々文章を以て名を後世に傳へんとするが如きは吾徒の素志に非らず男兒四十未だ事の成すあらずんば則ち已む思ふに嶺雲余と興に齡而立に達す其不惑に至るは猶十歳の隔つものあり十歳の間短しとせず吾徒は須らく力めて此間に於て其素志を貫かざるべからざるなり然らば則ち未だ以て歌ふべからず未だ以て哭すべからず若し夫れ嶺雲の此集を讀で彼を歌ひ彼を哭

するが如きあらば是れ固より吾徒の志に非ざるのみならず又實に嶺雲の期する所に非ざるべし

明治己亥歲春日

笹川臨風識

醉來意氣掃千軍、天下誰成血性文。
鐵馬夜馳窮北雪、大旗曉捲極南雲。
魯連踏海空存志、安石出山未樹勳。
回首百年家國事、張三李四一紛紛。

辱知 幸德秋水

問嶺雲兄
昔者武愚耳、今者文弱多。
武愚與文弱、優劣果如何。

辱知 佐藤秋蘋

自序

嶺雲子命數奇、齡三十、未だ功を成さず、志四方、未だ家を成さず。半世の苦學、頼に蠹魚の書を蝕せずと雖ども、一代の經綸、徒に海蜃の氣を吐くのみ。志大に才疎、悲を鼓して空しく齊王の門に立ち、眼高に手低、珠を懷いて猶ほ崑山の下に哭す。懶放俗に耐へず、猶急多く世と

違ふ。處る所毎に嶮巖、遇ふ所常に不平、其滿肚の牢騷と鬱勃と之を墨に灑ぎ、之を筆に驅り、下して字となり、抒べて文となる、其言や危、其辭や憤。境に觸れ、物に觸れ、激すれば即ち發す、元と一時の感を遣るのみ、何ぞ千載に知を待つといはん、而かも言々心血を瀝み（瀝ぎ）、語々肺肝を吐く、敢て名山に藏するを欲せざるも、亦髣髴を覆ふに忍びず。乃ち焚く當くして焚かざるの稿を哀めて、梨に災す。必ず世俗に讀まれんことを望まず、讀まれずんば、則ち之を人間の塵埃に埋まんよりは、急雨迅雷晦冥の夕、此を將つて仰いで大空に擲ち、之を霹靂の天火に焚盡さんのみ。

人才の壅塞

徳川幕府封建の制度は門閥の弊を養成して、上下人爲の分嚴に、格卑きものは才あるも用ゐられず、格貴きものは才なきも要路を占むるを得、登門杜絶、人才壅塞せらるゝもの三百年。而して其の弊の極まるや發して維新の革命となる。維新の革命は實に多く彼の士以下層の不平の輩によりてなされた。彼等利器を懷いて草廬に處り、櫜に伏して驥足を伸ばす能はざるの徒、鬱勃滿腔の不平、外舶突として來り幕府の紀綱弛廢の痕見れたるに乘じて迸りて、尊王攘夷の説となり終に倒幕復古の大業を成しぬ。幕府覆亡の原因固より諸多と雖も、人才の壅塞亦其一大原因たらずんばあらず。

幕府倒れ、王政建つ。維新の革命なつて封建門閥の制打破せられ、世襲の風廢せられ、材によつて人を用ひ、人材登用の途開け英俊競ひ進む、明治初政の彬々たる人材を以て満たされたる實に所以あり矣。

維新革命來、茲に三十年、世はまた人材の壅塞を見んとす。尊卑の門閥

は既に維新の革命に破れたりと雖ども、今日また舊新を別つの一新門閥をみる。舊進の者前に塞がつて、新進のもの進む能はず。進む能はざるの新進は益々多ふして、前に塞がるの舊進は動かざることに依然。於是乎、新進の進む能はざるものは、相背いて失意の壑中に陥らんとす。新進にして稀れに進むを得るものあらしむるも、これ皆便佞利口の徒のみ、狷介主角の人の如き、璧を抱いて空しく不遇に哭するあるのみ。蓋し今の世は巧利の世なり、器械的の世なり、唯物の世なり。今の世の風は大才を容るゝ能はず、今の世は則ち俗物の世なり、俗才子の世なり。舊進既に途を杜ぐ、新進にして稀れに進むものもあるも、圓滑輕薄の俗才子、小利口に非ざれば則ち得ず。翻々たる俗才子を除いては、大才と雖ども終に其才を奮ふに所なし、大才は時に媚び世に諂ふものに非ず、刀筆の吏たるは小才の事のみ。今の世終に大才を容るゝ地なし。

小才はよく鼠を捕ふるの狸兒たるのみ。大才は深山に哮ゆるの虎の如き乎、一聲よく百獸を嚙伏す。今の世狸兒の能にして馴らし易きを知つて、虎の威にして致し難きを措く。小能を見、小技にとる、所謂巧利の世なるもの此の如きのみ。

猫をして怒らしむるも牙を露はし鬚を豎つるのみ。虎を野に放つは天下の至險なり。有爲の大才を抱いて輒輒に沈淪する、これ虎の野にあるなり、畏るべきものは失意の大才なり。彼等意を當世に失ひ、望を當世に絶つ。絶望は人を暴にするなり、自ら其才あるを知り、而して自ら其才あつて而して用ゐられざる所以を知り、而して自ら望の今に繋く可らざるを知るに至らば、彼等寧ろ何事かを爲さざらんや。愚者の暴は憤を酒色に遣りて則ちやまんのみ、才あるもの憤りを洩さんとす、非常の事と雖もまた爲さざるを保する能はず。

維新の革命は實に幾多不平の徒の手によつて成されぬ、家もなく位もなく而かも才ある幾多浪士の經營に成りぬ、今日の弊にして極まらば、今の天下失意の才豈にまた往日の歴史を再びせざらんや。物平を得ざれば則ち激す、革命なるものは、不平の内に激して之を外に發するの噴孔な

り。維新の革命は幕末失意の士の不平の迸發のみ。革命の猛焰は一度積弊を盡き盡して、暫く人材の鈞衡を得たり、積弊再びす、今日の弊何を以てか之を拯はん、嗚呼何を以て乎之を拯はん。

沈滯は腐敗を生ず、波瀾は活動を與ふ。嗚呼今の世、人才壅塞するものは、社會に活動なければなり。内閣は依然たる元勳の内閣なり、改進黨は依然として大隈を戴けるなり、自由黨は依然として板垣を戴けるなり、硯友社は依然として紅葉を領袖とするなり。今の時一大旋風を吹起し、一大波瀾を捲起し、今の社會を一大震蕩せざんば、天下は遂に失意不平の徒を以て満たされん。旋風よ來れ、波瀾よ來れ。汝とともにあらゆる腐敗を吹き去れ、汝とともにあらゆる沈滯を捲き去れ。

三十年の泰平は姑息の風を養ひなし、苟且の俗を養ひなせり。人に口あつて手なく、辯あつて勇なく、粧飾あつて赤心なし。失意不平の徒と雖ども、また往日幕末浪士の熱誠と熱意とある頗ぶる疑ふべし。僅に五斗米を得れば則ち腰を屈するを耻ぢず、略はすに利を以てすれば拂髻を愧ぢず。昨日朝を攻めし筆を以て今日は野を撃ち、吏を罵りし口を以て今日は上官に媚ぶ。天下不平の徒また小不平あるのみ、食を得ざるに

不平し、職を得ざるに不平し、官を得ざるに不平し、願を得ざるに不平す。其不平や小なり、故に反覆表裏を常にせず、此の如きの徒不平ありと雖ども、失意たりと雖ども、以て眞に事をなすに足らざるなり。幕末の士は、死を決して天下後世の爲めに、門閥の積弊を破らんとせり、一身の榮達は寧ろ彼等が企圖せし所に非ず、彼等其一身を犠牲として一大目的に殉ぜしのみ。今の所謂失意不平の徒亦よく此大決心を有し、大勇氣を有するや否や。既に一身の爲に不平す、何ぞ一身を捨つるの勇あらんや。

嗚呼天下後世のために身を挺し、命を捨て、今日の積弊を一洗せんとするものは誰かある、嗚呼今の世に旋風を吹起し、波瀾を捲起するもの天下終に人なき歟。而かも今の世旋風なかるべからず、波瀾なかるべからず。嗚呼々々誰れに待たん、誰れに待たん、噫。(二十九年九月稿)

偉人出でよ

社會は腐敗し、人心は倦怠す、偉人出でずんば此沈滯を如何せん。

明治維新、一たび西歐の風を採つてより茲に三十年、物質の文明の弊今日に至つて極まる矣、所謂物質の文明なるものは、外を華麗にして内を闇黒にするものなり、電燈燦爛月光を奪ふて盛裝花の如き満都の士女を照せども、道義溷濁相背ひて人は獸畜におもむく、世を擧げて智巧を弄し、實利に驚す。實利に驚す、黄金に渴仰して人道を棄つ、智巧を弄す、權詐を重しとして陥擠を忌まず、輕佻、風をなし淫靡、俗をなす、延臣は色に荒み、朋黨節を賣る、請謁畫聽かれ、賄賂公行す、人、利に非ざれば動かず、利を獲んが爲めには、相欺いて怪しまず、今の世、眞摯なく、熱誠なし、唯黄金あるのみ、唯權詐あるのみ、浮薄、淫靡、權詐、僞善、巧利、今の社會はあらゆる惡徳を有し、今の人はあらゆる惡徳を行ふ、社會の風紀此の如くにしてやまずんば我邦家を如何ん。之を政界に見ずや、誰れか背膺臥薪といふ、好色宰相痴癡依然、何の爲めにか租を苛にし、税を倍せる、日比野原頭宏樓巍々。累々たる三百の頭顱黄金の爲めに皆其舌を二にす、自由黨の腐敗はともいふに足らず、彼の進歩黨と稱するものも、念頭何ぞ所謂國利民福あらん、夢は大臣の榮華に迷ふ、剛毅敢往死を視る歸するが如く、慷慨悲壯眞に國を以て憂とし、民を以て憂となすもの、寥々として曉星にだも若か、之を文界に見ずや、蠢々たる小學者、小文士、眼孔豆の如く膽氣狹窄、作家に大理想なく、評家に大見識なし、輕佻自ら喜び、皮相自得す、街識を以て相誇り、穿鑿に相罷る、創見なく、鑑識なし、多情多感、深刻沈痛、眞に熱血あり狂熱あるの天才者一人なし。之を宗教界に見ずや、法を説くの口は利をいひ、精進の身にして色を漁す、異端熾に淫祠瀾る、今日また堅實の信仰を有し、堅固の道徳を有す

る一高僧を見ず。

要之するに、今の時世は智巧の世なり、權詐の世なり、皮相の世なり、浮薄の世なり、輕佻の世なり、僞善の世なり、小人物陸跳の世なり、嗚呼今の時大人物出でずんば誰れか頽瀾を既倒に回さん。

所謂大人物とは、眞摯至誠の人をいふなり、淋漓たる熱血と熱情とを有し、溢るゝが如き同情を有し、豫言者的の透徹なる眼光を有し、宗教者的の熱實なる熱意を有するの人をいふなり、卓然として毀譽褒貶を顧みず、屹然として貧富貴賤の外に立つの人をいふなり、嗚呼物質的の文明は世を擧つて巧利の人となし、智巧の人となせり、此種の人物、之を天下に求めて得可らず、今の世に憂ふる所は、實に此種の偉人を缺きたるにあり。世運を一轉するは偉人の大手腕を要す、嗚呼今日社會の沈滯、一たび之を決せざる可らず、三十年前幕政の末路腐敗は維新の革新之を決せり、今日の沈滯何を以てか之を決せん、嗚呼偉人の大手腕にまつこと多し。

革新は活動なり、熱血は精采を洗ひ出す、古來沈滯の世界、一たび革新を経來れば頓に局面を一新す、己身の病毒は昇来以て滅すべし、社會の病毒は何を以て滌ふべきか、而して革新には大人物を要す、幕政の倒るゝや、山崎闇齋、淺見廻齋之が先をなし、山縣大貳、竹内式部の徒之に踵き、平田篤胤、頼山陽、林子平、蒲生君平、高山彦九郎の徒其勞を助成し、藤田東湖、吉田松陰等其後をなし、終に維新の革新となれり、佛國ボルボン王家の倒るゝや、ウオルテアーあり、ルーソーあり、モンテスキューありて其地を爲し、ミラボー、ラヘット之が礎を固め、ロベスピエールあり、マラーあり、ダントンあり、其功を成して九十三年の革新は成れり、偉人なくんば革新成らず。今の日本は漸く輕薄、利口、僞善、權詐の小人物に飽かんとして、偉人をもとむるの呼號漸く高し、偉人の傳記の頃日頻りに世に出づるものは、世人が偉人を懷ぶに切なるが爲めにあらざるや、今の世に偉人を求めて得ず、姑く古偉人の傳記に藉つて、其渴せるの望を醫せんとするにはあら

ずや。

嗚呼今の日本が偉人をもとむる抑もこれ何の微ぞや、何の微ぞや、嗚呼沈滞せる今の社會は、一大波瀾を簸起して、これに活動を興へざる可からず、偉人出でよ、偉人出でよ。(二十九年八月稿)

青年に及ぼせる功利的文明の弊

青年の革命健兒たる所以、唯其勇往直前、利害を顧みず、成敗をとはずして、身を殺して仁を爲す底の大決心あるによる。而して之を今の我青年にみる、果して大決心あるや否や疑はざるを得ず。蓋し王政維新、封建の制壞るゝと共に、昔日の武士道全く地を拂ふて、西歐物質的の文明滔々として注ぎ来る。所謂武士道に尙ぶ所は廉耻なり剛毅なり、守る所は義是のみ。義の爲めに情をすて、義の爲めに利をすつ。武士道は献身するを教ふるなり、忠君、愛國の義の爲めに献身するを教ふるものなり。故に當時の武士氣質なるものは、一死を輕んじて然諾を重しとし、鼎鑊を甘しとして難に殉ずるの概ありき。故に彼等の心念唯献身あるのみ。利をいふを忤ひ、情に繋がるるを恥ぢたり。而して物質的文明の風一度入るや、世は相背ひて功利の崇拜者となれり。蓋し、物質主義なるものは、唯形而下を知るのみ、形而上を知らず。唯形而下のみを知る、故に唯人生快樂あるのみなるを知るのみ。既に快樂のみを知る、故に自愛を主とす。自愛を主とす、故に眼中功利あるのみ。既に功利的なり、彼等何ぞ慷慨義につくをせんや。何ぞ身を殺して仁をなすをせんや。何ぞ一死を輕んじて然諾を重んずるをせんや。みる所、唯利のみ、彼等何ぞ所謂眞に献身なるものを解せんや。嗚呼今や此風既に天下の人心に浸漸して、而して所謂明治の新教育をうけたる青年の徒、殊に其感化を被れること多し。彼等は殆んど根本的に物質的の學問と功利的の思想とに陶冶せられたり、實利の重んずべきを知つて、大義の就くべき所以を知ら

ず、身命の重んずべきを知つて、從容難に殉ずる所以の更に重きものあるを知らず、今の青年は大概此の如きのみ、故に青年の意氣あるもの終になし、唯功利を主とす、故に事に當て、先づ利害と、成敗を顧る、左顧右眄、進まんと欲して遲疑するを免れず、彼等弱氣なし、活氣なし。苟合偷安、唯圓滑をもとむるのみ、何の活火あらん、何の鋒鏑あらん。此の如きの青年は共に逸に處るべし、難に當るに足らず。彼等青年なりといふと雖ども、何ぞ共に革命を語るに足らんや。碌々たる小利口、小才子、斗筭と雖も、彼等何をかなさん。我は圓滑なる小利口を欲せず、滑脱なる小才子を欲せず。唯血性燃ゆるが如く、身を挺して難に赴く眞の青年を欲す。嗚呼今の時に當て、果して一己の利害をすて、眞に其奉ずる所に献身せんとするの大決心あるの青年、果して幾人あるべき。功利物質の文明は青年の意氣を消磨せり。文界の沈滞や、教界の腐敗や、革命刷進の青年にまつ所のもの多くして、而して青年の意氣また此の如しとせば、嗚呼々々之を如何せん、之を如何せん。(三十年一月稿)

新春の第壹喝

青年は活氣なり。進取の靈火洞然として内に燃ゆ。唯直前邁往向上を知て、保守を知らず。未だ世故を知らず、故に猶豫なし、狐疑なし、唯希望の光を望んで勇進するのみ、故に眞摯なり、熱誠あり。故に青年の活氣あり。故に革命の大業多く青年の健兒に屬す。青年は洵に一國の元氣なり、守成に適せずと雖ども、舊物の打破青年に非らざれば能はず。青年血誠の靈火、よく沈滞汚敗の氣を燃やし盡して、之を清粹にす。一國元氣凝滞あれば、青年あつて唯之を疏通し得べきのみ。

明治、年を重ねる茲に三十。初年當時にありて垂髫のもの、猶初老に近からむ。況んや當時青年の活氣、よく維新改革の功をなしたるもの、今や則ち頽然として老へり。老いたる者は儉安を喜ぶ、明治初年の元氣ま

た見るに由なし。一國の元氣まさに沈滯す。嗚呼今の時に當て、奮然身を挺して此沈滯を捲き去らん者、唯今の青年にあるのみ。

然るに今の青年をみよ、彼等よく此活氣ある乎。果して進取の靈火ある乎。功利唯物の文明は世を擧げて功利唯物の人とせり、此風の浸染殊に所謂新教育をうけたるの青年に多し、彼等は最も多く功利唯物的教育をうけたり、功利唯物の教育は、人を誘て唯實利にこれ就かしむ。唯實利をこれみる、苟くも實利を収むるに非ざれば爲さず、左顧右眄、唯實利を的とするのみ、獻身のこと、彼等の解する所に非ず。己れに利あらざれば捨て、知らざる爲ねす。豈に身を殺して仁を爲すの非實利のことをなさんや。於是乎、青年の活氣なるもの全く銷耗す、血誠なく直前邁往の勇なし。青年にして既に此の如くんば、一國終に元氣なるものなきなり。

敝れたる縋袍をきて狐貉をきるものと立ちて恥ぢざるは青年の意氣なり。彼等唯希望あるのみ、精神的に自ら標置する所あり、故に形骸の事その顧みる所に非ず。往日の書生を見よ、短衣高屐揚々として『今の參議は皆書生』を高唱せしに非ずや。今の書生を見よ、その意に介する所は唯邊幅にあり。邊幅飾らずんば世顧みず、唯世に售らんとす、故に今の書生邊幅を飾らざる能はず。且つや、功利的の氣風は人を局促にす。功利唯物の教育によつて、養成せられたるもの、小利口あるのみ、小才子あるのみ、的とする所唯實利にあり、故に苟合ならざる能はず、面従ならざる能はず。巍然として自ら操守して、售れんことを求めざる如きは、彼等の夢想に何も知る所に非らず。既に面従なり、苟合なり。彼等何の血誠かあらむ、何の眞摯かあらむ。今の青年たるものは、青年たる所以を失す。彼等は一種の怪物なり、紅顔にして心には老の波よせたり。怪物や、怪物や、彼等は既に共に進取を談ずるに足らず、革命をいふに足らず。今や彼の往日青年の人は既に頽然として老いて、而して今日の青年なるもの、また此の如しとせば、嗟呼嗟呼誰と共にかせん。

嗚呼々々明治既に三十年。第二革命の機は既に熟す。山雨來らんとして

風滿樓。政治界は吾人の知る所に非ず、宗教界を見ずや、文學界を見ずや。南山の陽既に殷雷あり霹靂まさに空を劈いて下らんとす。まさに是れ、青年雞聲をきいて蹶起すべきの秋にあらずや。而して今の青年、果してよくこれあり得べき歟。吾人私に之を憂ふ、血誠なく、眞摯なき青年、果して共になすに足るべきものありやを。彼等果して一時の名の爲めにするなき歟、果して一時の利の爲めにするなき歟。

而して吾人の特に杞憂に禁へざるものは、今の文界に於ける所謂新進の文士なり。彼等果して天地を斡旋する底の大手腕あるべき歟。革命は打破なり、打破して向上するなり、彼等果して破壊の敢爲ある歟、向上の大精神ある歟。革命は既に破壊なり、實利的にあらず、獻身的なり、彼等果して自らを損して悔いざるの熱誠ある歟。既に獻身的なり、身を殺し仁をなす底の大決心を要す、彼等果して之をなすに足るの眞摯ある歟。吾人は今の所謂新進文士について之を疑ふ、彼等果して一時の流行にうかされたるにあらざるべき歟、文界の名をなし易きに乘ぜんとするにあらざる歟、文筆の事の逸して贏得ることの易きを利せんとするに非ざる歟。今の熱誠なき、摯實なき、實利的の青年にして、果して然るが如きものなければ洵に幸なり。

且夫れ人の情安きを偷み、逸に怙る、激せずんば奮はず、窮せずんば勵まず。今の文壇なるものは、之を諸他のカリヤに比す、安にして逸なり、一度文壇に上るもの、其筆僅に文をなすを得ば即ち可なり、其才僅に書を解するを得ば即ち可なり。必ずしも大主能あるを要せず、必ずしも大見地あるを要せず、幽玄の理想あるを要せず、熱烈の信仰あるを要せず、漫りに寫實の觀察に托し、經驗折衷の學風といふを名として、餽釘剪裁一時を糊塗すれば即ち足る。唯文を爲すこと多く、作を出すこと多ければ、庸衆何の眼識あらんや、其實を識らずして其名に銜し、其力を知らずして其數に駭き、相爭うて其名を喧傳す、名をなすの易き文壇に過ぐるものあらんや。而して僅に名をなせば、文を賣て優に一口を糊すべし、其潤筆の料もとより之を今日西歐の貴に比す可らずといへども、また餓

えて死するある往日の文士の如きものあらず。一夜の呻吟以て數金を贏得べし、今の文士の他に比して贅澤なるを見ずや、今の時世は寧ろ文士を遇する厚きに過ぎ、また文士を見ること高に過ぎたり。此の如く安にして逸なるの境に處る。文士たるもの何ぞ奮はん、何ぞ勵まん、勵まざるも、奮はざるも、彼等は容易に名をなすべく、彼等は優に衣食し得べし。人此裡に入る、儉安たらざらんとするも得んや。惰慢ならざらんとするも得んや、安逸は沈滞なり、精神的に人を腐敗に導く。今彼等新進文士にして、假令向上の精神あり、献身の決心あらしむるも、猶此微菌に腐蝕せらるゝを免れじ。何ぞ況んや功利唯物の汚氣中に養成せられたるものをや。嗚呼文界革命の大活劇、終に之を今の新進文士に托するに足らざるべき歟。雨後の春草、地上に抽くもの一に何ぞ多き、而して遂に擲するに足るものなき乎、熱誠なる一人なき乎、眞摯なる一人なき乎、活火内に燃ゆる一人なき乎。嗚呼革命の健兒つひになき乎。

然れども、然れども、人、氣運をつくる乎、將たそれ氣運、人をつくる乎。チャールス一世にはコロムエルあり。革命の氣運既に熱せば、文界將に一人のコロムエルを胎み來らざらんや。文壇に鐵騎を麾いて、韓天旋地するの巨手出でざらんや。今の新進文士遂にいふに足るものなしとせば、吾人は唯望を當來に繫けて、之を仰望す。美人は天の一方にあり、髣髴として形影あり、喚べども未だ來らず、招けども未だ到らず、歳は改まる、氣運は更に一歩を進む、氣運果して歲とともに新たまらざるべき歟。氣運果して吾人の希望を實にするを得る歟。吾人は之を明治三十年の文壇に見ん。(三十年一月稿)

詩人と人道

人道とは何ぞ、相憐の謂のみ、相憐とは何ぞ、同情の謂のみ。詩人は最も同情に富む者と稱す、詩人人道に冷かなるものなりといふは、吾人の

信する能はざる所、詩人に果して人道に冷かなるものあらむ歟、吾人は之を許して眞詩人と稱する能はざるなり。彼等にして人類に相憐を表する能はずといふ、吾人はその眞に山川花鳥に同情するを信する能はず、既に同胞の爲めに泣く能はず、彼等にしてよく眞に戀愛の爲めに泣くといふを信する能はず、彼等にして眞によく戀愛に泣き、花鳥風月に同情せば、何を以てか人類に同情し同胞の爲めに泣く能はざらんや。詩人にして人道に冷かなる、吾人之を稱して眞の詩人に非ずといふも何の不可かこれ有らむや。

今の小説家は最もよく人間の暗黒面を描くを以て誇るものなり、而かもその一人、果してよく社會下層細民の爲めに泣き、其悲惨の境遇を描出して、之を天下に懸へたるものある歟。彼等の奇僻の人間を描くやよし、不具の人間を寫すやよし、然れども飢に叫び寒に泣く悲惨の境遇は、彼等の題目たる能はざるべき歟。戀愛をうつすもよし、失戀を寫すもよし、然れども絶望して溝壑に轉ずるもの、果して更に悲惨の運命を有するに非ざるべき歟。嗚呼吾人之を知れり、今の所謂詩人文士と稱するもの、輩は、一時の流行を追ふて其流行の趨く所に從て其筆を動かすのみ。彼等内に一點の眞温情あり、一毫の眞同情ありて、鬱勃たる滿腔の感慨抑えんと欲して抑ゆる能はずして始めて、之を筆に下したるものに非ず、彼等のよく失戀に泣き、無能に同情を表するが如くなるも而かも一點人道に敦きを認め得ざるは豈にこれが爲めのみ。

嗚呼人生の悲劇、彼の下流細民の生涯より甚だしきものある歟、失戀なるものもとり悲惨なり、而れども彼等は唯精神的に絶望の谷に陥れるのみ、未だ貧窟裡の民が精神的肉体的に絶望の暗黒に陥れるが如くならず。彼の不具なるもの、生涯亦もとり悲惨なり、而れども猶肉体的に然るのみ、未だ貧窟民の如く然るにあらず、それ活きんとするは人の皆之を欲する所、而かも彼等は時に自ら死するものすらあるなり、何ぞや、彼等は絶望の極に陥れる者なり。彼等は生きて生を繋ぐの糧に乏しく、而して既に生を繋ぐの糧に乏し、口腹のものとめこれ急、何ぞ況んや聲色

の慾を得んや、彼等はあらゆる快樂なるものを其一身より捫はれたるなり、あらゆる幸福なるものを其一生より奪はれたるなり、希望あれども必ず達するを得ず、需求あれども必ず給するを得ず、それ人希望あるが故に立つ、快樂あるが故に生く、既に希望に達すべきなく、快樂のもとむべきなし、彼等また何のために生くるを欲せんや、何のために世にあるを望まんや、彼等生きて何の用ぞ、生くると雖ども既に死す、寧ろ死して早く身神の寂滅につきて知る莫らんには若かず、彼等何ぞ生を輕ぜんや、死の更に樂しきを知ればなり、嗚呼人生病に死するものもとより多し、然れども貧のために縊死し投水するものまた決して少々に非ず。彼等の運命が斯くの如く悲惨なり、悲惨なる此の如くにして之が爲めに泣き之が爲めに同情するもの少きは何ぞ、吾人敢て之を天下に責めず、彼の同情に富まざる可らざる詩人文士にして猶今日の如きを見ずや。

然れども貧民が天下多數の同情をひかざる抑もまた其所以なくむばあらず、蓋し彼等を以て憫愍のために此域に陥れるものとし、而してまた彼等を以て罪惡の府となせばなり。而れども知らずや、彼等が罪惡を犯すに至るものは寧ろ其貧に因して然るものなり、而してまた彼等が此境遇に陥れるものは、其社會の潮流に乗る能はざりしによるなり。吾人は必ずしも悉く然りとはいはず、而れども其多數は必ず自業の致す所に非ずして境遇のためにこれに陥り、而して自ら好むでなすに非ざるも、必至に迫られて罪惡を犯すものなり。社會の潮流に乗る能はざるもの固より自らに不能なりとはいはず、然れども社會の順風に駕するもの多くこれ僥倖兒のみ、然らずんば玕(奸) 玕便佞の徒のみ、而して誠實眞摯のもの世と共に醒醉する能はずして却て逆流に落つ、假令然らずといへどもまた世波の激動に堪ゆる能はざる弱者のみ、薄運者に非らざれば則ち弱者、弱者が生を好むの情、自ら殺すを能くするも猶飢寒に死する能はず、死せんよりは寧ろ罪惡を犯さん、清廉高潔の士に非らざるよりは、

誰か飢死に瀕して猶凛然として其名を潔くし其節を守るを能くせんや。彼等に食を奪ふて猶彼等に責むるに仁義を以てするは豈に彼等のよくする所ならんや。嗚呼衣食足て後禮節を教ふべきのみ、貧者の罪を犯すや、其責其人にあらずして其貧にあり、彼等をして此罪惡を犯さざる能はざらしむるの運命、寧ろ憐むべくして惡むべきものあるを見ず。嗚呼滔々たる天下、今日白晝に相欺むき、稠人の間に相詐はり靦然、唯だその巧みに法網を潛るが故に、紳士と稱せられ、紳商と稱せらるゝのみ、何ぞひとりかの貧者に責めんや、貧者に責めんや、嗚呼貴紳の食前に供せらるゝ葡萄酒の美酒には僅に幾分の關稅を課せられたるのみ、而して貧民は一日の罷勞をいやすべき一杯の濁醪に高價の稅を拂ふなり。マニラ、ハバナの葉煙草は一厘の印稅をも課せられざるも、貧者の骨休め一服刻煙草には、彼等は幾何の重稅を拂ふなり。十九世紀は階級を打破したりといふ、而かも富貧の懸絶を以て人爵の差等に代へたるを知らずや。貴の賤を壓すると、富の貧を壓すると、實際に於て何等の相違あるべき乎。代議の政体布かれたりといふ莫れ、所謂代議士なるものは中等以上の富者の代表者たるのみ、彼等は自己の選舉者に便にせんことをこれ知るのみ。彼等は貧者の爲めに代りて懇ふるあるなきなり。貧者は假令不平あるも、不満あるも、其杜屈以て伸ぶる所あるなし。天に泣くも天冷々、地に泣くも地冷々、法は彼等の爲めに庇護せず、行政の者は彼等を度外に措く、彼等は恨を呑んで黙せざる可らず。嗚呼誰れか此等の愚者となり、庇護者となり、之に代て天下に懇へ、之に代て懷抱を伸ぶべきものぞ。

宗教者あり、彼等は此大任を盡くすべきの職責あり、而るも彼等の慈善を名とするも實は己れの宗教に利せんとする私心の其の間に介せるを免れず。彼れ等の多くは偽善者なり、其の名を美にして其の行を匿にす、彼等には以て此れ等の貧者を托すべきに非ず、未來の福田を説て貧者の財囊を絞るが如きは更に酷だし、斷じて貧者の味方に非ず。庶幾くは唯詩人文士あるのみ、もし眞に意を此に注がば憐むべきもの、

悲むべきもの、泣くべきもの、憤るべきもの、慨すべきもの、皆是れのみ。貧民の爲めに代りて其枉屈を翹へ、更に其悲惨の境遇を描きて天下に示す、血あり涙ある詩人文士、希くは起てこれに従へよ。而れども錢の爲めに文を賣り、錢の爲めに書肆に叩頭するものよくする所にあらざ、一身を以て人道の爲めに殉じ、毀譽禍福を以て度外に措く熱誠あるを要す。起て貧者の味方となれ、起て貧者の味方となれ、花鳥と戀愛とのみ必ずしも汝等が好題目に非ず。社會の最大數を占むる貧者の味方となつて天下に絶叫する、また人間の一大快事に非ずや。

嗚呼我に一萬金あらしめよ、我は先づ東京中に於けるあらゆる貧者乞食の徒、檻穽（樓）蓬髮の者を率ゐて、一夜彼の所謂紳士と稱するもの、宴遊の場たるあらゆる紅樓翠閣に上り、彼等をして牛飲飽食せしめ、これが興を助くるに彼の紳士貴顯と稱する人々の宴に侍して、嬌語囁笑するあらゆる結妓なる者を喚來つて結歌舞踏せしめん哉（二十九年三月稿）

境遇と靈性

言ふ莫れ習、性となつて。言ふ莫れ境遇、人を造ると。境遇もより人を造るあらん、習もとより性となつてあらむ。然れども人はまた其自己を有す、其自己の靈性を有す、這個の自己や、靈性や、之を熱して鍛けず、之を鑢して磨せず、之を槌して碎けず、習や境遇や、よく人を變ふることはあらむ、而かも此靈性、此自己をも併せ易ふること能はざるなり、故に人に二面あり、習によりてなれる性あり、而してまた生得の靈性あり、境遇によりて造られたる自己あり、而してまた本來の自己あり。然れども此本來の自己や生得の靈性や、常に境遇の我や習性やに蔽はれて深く隠る、隱約として認め易からざるなり。境遇の我や、習性や、日常舉手投足の上に顯はれて吾人の不斷に目眩する所。たゞ吾人の目眩する所たり、故に此境遇の自己や、習性やを捉へて、直ちに之を以て其

人の眞實とし、其人の本來とす。殊に知らず、其眞實や其本來やは却て其見難く知り難きの邊にありて存するを。而かも其眞實や其本來やの顯はるゝ猶闇夜の電の如く然り、時に黒雲を穿破して一閃す、認めんとすれば既に隠る、故に甚だ捉へ難きなり。捉へ難しと雖どもこれや却て人の眞實なり、本來なり。故に眞によく人を觀て透徹ならむを要せば、其皮相の習性や、境遇の我やをみると共に、更にまた其内奥の自己、生得の靈性を看ざる可らず、然れどもこれをなすこと別に一隻眼を有するものにして、始めて得べきのみ、之をなし得て乃ち人を見る。惡者必ずしも惡ならず、蟬蜂の頭玉を藏す、醜腐恢恢のうち、未だ必ずしも玲瓏無塵の美德を認め得ずむばあらず、既に之を認め得、於是乎惡者必ずしも惡むべきを覺えず、否寧ろその此の如きの靈性、此の如きの本質ありて、而して境遇の爲めに味まされ、習性の爲めに晦まされ、不知不識醜腐恢恢の闇中に墮落し去りたるを憐ますむばあざるなり。之を心の土よりして同情といひ、行の上よりして寬恕といふ。此寬恕、此同情、人之を缺く可からず。而して殊に小説作家を然りとす。夫れ社會の法律なるものは行の蹟を罰するなり、社會の制裁なるものは行の末を咎むるものなり。法律や、制裁やの外に立ちて獨り能く所謂惡者なるものに美德を認めてこれがために一滴の涙をそぐもの文士を措てそれ誰かあるや。法律が之を罪として牢獄に投じ、社會が之を罪として幽ひするを耻づる間に在て、獨り彼等が辯護者となり、彼等が慰藉者となるべきものを、文士を措てそれ誰かあるや。故に小説作家の人を描くや、表よりして之を寫して足らず、更に裏よりせざる可らず。外よりして足らず、更に内よりせざる可らず。正よりして足らず、更に側よりせざる可らず。徒らに行の末、行の迹を寫して、以て其の人を描き得たりといふも、猶これ其半面を描きたるなり。それ良工の人を畫くや、眉目服飾の外に於てよく、其人の氣象をして紙幅上に活躍せしむ。良作家また然らざる可らず、惟に人間半面の境遇の自己と、習性とを寫して足らず、更に其眼光内奥の靈性、本來の自己とに徹して人間そのものの全眞實を描きて、之を文學